

練習問題1_タイピング練習

練習問題1【タイピング練習】を開いて、以下の文章を入力しましょう。

私がこの^{はなし}を書き始めたのは、ある暑い夏のことである。私は東京のある所の高等学校の教師をしていた時分、暑中休暇を利用して故郷の松山へ帰った。実はこれが私にとって四年振りの帰省であったから、その喜びは一入である。汽車を降りると、そこには^{ふるなじ}古馴染みの顔が次々と現われる。みんな変わらぬ愛嬌で私を出迎えてくれた。私はこの町の空気と水とが、どうしても忘れられず、またこの町の人たちの心の^{なぐさ}温かさにいつも慰められていたのだ。

夏目漱石「坊ちゃん」

ある日の^{くれかた}暮方の事である。一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。彼は濡れた狐のように身を縮めて、大きな袋を抱えていた。その袋には盗んだ物が入っているのではない。彼はただの下人である。しかし、彼がこの門の下に坐っているのは、他でもない。彼は職を失ってしまったからである。

芥川龍之介「羅生門」

メロス^{メロス}は激怒した。必ず、かの邪智暴虐^{じゃちぼうぎやく}の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれたこのシラクスの市にやって来た。

太宰治「走れメロス」

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はばか}る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起こすごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。というのは私はその頃、金に非常に窮していたからである。私が鎌倉に

着いた時、それはちょうど夕暮れであった。私の宿は茅ヶ崎にあった。そこから見ると、鎌倉の方がずっと遠くに見えた。海岸には砂がきらきらと輝いていた。葉柳の枝には銀色の露が光っている。私はその光り輝く砂や枝を見ながら、一人でぼんやりと歩いていた。

夏目漱石「こころ」

わがはいはねこである。名前はまだない。

どこで生まれたかとうんと見当がつかぬ。

何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

わがはいはここで始めて人間というものを見た。

しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}獰悪な種族であったそうだ。

この書生というのは時々われわれを捕えて煮て食うという話である。

しかしその当時は何という考もなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。

ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワし

た感じがあったばかりである。

掌の上で少し落ち着いて書生の顔を見たのがいわゆる人間というもの
の見始めであろう。

この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。

第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。

その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。

夏目漱石「吾輩は猫である」